



サタンと人類の戦い

悪天使と悪霊の現実

大争闘シリーズ No.2



大争闘シリーズ No. 2

サタンと人類の戦い

悪天使と悪霊の現実

(キリストとサタンの大争闘 30、31 章)

目次

Contents

サタンと人間との間の敵意	1
悪の勢力の猛威	4
惰眠をむさぼるキリスト者	7
重大な危険	11
サタンに抵抗する力	13
天使の实在	16
神の民を保護する天使	19
サタンの勢力	22
悪霊につかれた者	25
サタンの巧妙な策略	29

はじめに

超能力や霊現象、手相や占い、口寄せ、巫女、イタコ、ユタ、ノロ等々の否めない現象が身の回りにたくさんある。その本性は何か？



悪魔、悪霊、悪天使は実在するのか？実在するなら、その目的は何か？人類を欺き、滅ぼすためにどんな策略を用いるのであろうか？

聖書は、明確な解答を与えている。

「聖書に直接的な多数の証拠があるにもかかわらず、悪魔と悪天使たちの存在と働きを否定する人々ほど、悪霊の力に動かされる大きな危険の中にある人たちはいない。われわれが彼らの策略に無知であるかぎり、彼らは、われわれ

には想像もつかないほど優位にある。多くの者は、彼らの暗示に耳をかし、それでいて、自分自身の知恵の命じるところに従っていると考え。このために、サタンは、人々を欺き滅ぼすために全力で働く。世の終末が近づくにつれて、サタンは存在しないという考えを至る所に広めるのである。自分と自分のやり方とを隠すのが、サタンの手である。」

サタンと人間との間の敵意

「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう」(創世記 3:15)。人類の墮落後、神がサタンに発せられたこの宣告は、終末に至るまでの各時代にわたる預言でもあった。そしてそれは、地上に生存するすべての人類が参加する大争闘を予表していた。

「わたしは恨み [敵意—欽定訳] をおく」と神は仰せられた。この恨みは、人が生まれながらに持っているものではない。人間は、神の律法を犯した結果として邪悪な性質となり、サタンに敵対するのではなく、協調



するようになった。罪人と罪の張本人であるサタンとの間には、当然、何の恨み（敵意）もない。両方とも背信の結果、悪となってしまったのである。背信者は、他の人々を自分の模範に従うように勧誘して、同情と支持を得るまでは安んじない。ここに墮落天使と悪人たちは、絶望的なつながりで結ばれ、あくまで神に敵対することを決心してしまった。ゆえに、もしも神が特別に介入されなかったならば、サタンと人間は、天に対抗して同盟を結んだことであろう。そして人類は、サタンに恨みを抱くのではなく、彼と結束して神に反抗したことであろう。

サタンは天使たちを反逆させたように、人類をも罪に陥れ、神への反逆に参加させようと計画した。他の種々の点では意見の相違があるにしても、キリストを憎悪する点ではサタンも墮落天使も一致していた。現に今日まで、彼らはこの結束を堅くして、宇宙の支配者に逆らってきたのであった。しかしサタンは、彼と女との

あいだ、彼のすえと女のすえとの間に恨みが存在するという宣言を聞いたとき、人間を墮落させようとする彼の努力が阻止されること、すなわち何らかの方法によって、人類が彼の力を否定し、抵抗することができるようになることを知ったのであった。

人類が、キリストを通して、神の愛とあわれみの対象であることを知ったとき、サタンの人類に対する恨みが燃え上がった。彼は、人類を贖おうとする神のご計画を覆し、そのみ手のわざを傷つけ汚すことにより神を非難し、神のみ栄えを汚そうと望んでいる。彼は天には悲しみを、そして地には悩みと荒廃とをもたらすことを望んでいるのである。そして彼は、これらの害悪はことごとく、神が人類を創造したために起こったと指摘する。



人間のうちに、サタンに対する敵意を起こさせるのは、キリストが心の中に植え付けられる恵みである。この悔い改めに導く恵みと更生力が存在しない限り、人類はサタンの奴隷—何ごとに対してもその命令に従う—である他はないのである。しかし、心の中の新しい原則が、これまで平和であったところに争闘を起こすのである。ついにはキリストが与えてくださる力によって、人間は、横領者にして暴君なるサタンを拒絶し抵抗する力を得る。誰でも、罪を愛する代わりに罪を憎み、これまで心の中を支配していた欲望に抵抗して、それに打ち勝つならば、それは、全く上からの原則が働いている証拠である。

悪の勢力の猛威

キリストの精神とサタンの精神との間に存在する敵意は、イエスのご在世当時における、

世のキリストに対する態度に著しくあらわされた。イエスが世の富や華麗さ、威光を持って来られなかったために、ユダヤ人が彼を拒んだというのではなかった。彼らは、イエスが、外面的利点の不足を補って余りある力を持っておられることを認めていた。しかし、キリストの純潔と聖潔が、不信心な人々の憎悪を引き起こした。彼の罪なき克己と犠牲の生涯は、高慢で肉欲をほしいままにする人々への、絶えざる譴責であった。事実、この点が、神のみ子に対する憎悪を引き起こしたのであった。サタンと悪天使たちが悪人たちに加わり、背信の全勢力が、真理の戦士であるイエスに差し向けられたのであった。キリストの弟子たちに対しても、先にキリストにあらわされたのと同じ敵意があらわされる。罪のいとわしい性質を認めて、上からの力によって誘惑に抵抗する者は誰でも、必ずサタンとその部下たちの激しい怒りを引き起こす。真理の純潔な原則に対する憎悪、また、それを擁護する者に対する迫害と非難は、罪と罪

人が存在する限り生じるのである。キリストに従う者たちとサタンのしもべたちとの間に、一致はない。十字架のつまずきはなくなっていない。「いったい、キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける」(Ⅱテモテ 3:12)。

サタンの働きに携わっている者は、彼の指揮のもとで常に活動しているが、その目的とするところは、サタンの権威を確立し、神の政府に対抗する彼の王国を建設することにある。そのために、彼らは神の民を欺き、これを惑わして、キリストから引き離そうとする。指導者サタンと同様、彼らはみ言葉を曲解し、誤解させる。

サタンが神を非難しようとしたように、その部下も神の民を中傷しようとする。キリストを死刑に処した精



神が、彼の弟子たちをも滅ぼそうとして悪人を動かすのである。このことは、すでに最初の預言において予告されている。「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。」これは終末まで続くのである。

惰眠をむさぼるキリスト者

サタンは、彼の全軍を動員して、戦闘に全力を傾けている。彼が、大きな抵抗に会わないのはなぜであろうか？キリストの兵卒である者たちが、惰眠をむさぼり、冷淡であるのはなぜであろうか？それは彼らが、キリストとの真のつながりをほとんど持っておらず、キリストの霊に欠けているからである。彼らの主にとって、罪はいまわしく嫌悪すべきものであったが、彼らにとってはそうではないのである。彼らは、それに対してキリストのように決然と抵抗を

しない。彼らは、罪がいかに邪悪で、いまわしいものであるかを知らず、暗黒の王の権威と性質の両面について、盲目である。サタンとその働きに対して、彼らは敵意を抱いていない。その理由は、キリストとその教会に対して彼がどんなに戦線を拡張しているかについて、彼らがかきわめて無知だからである。多くの人々はここで欺かれる。彼らは、自分たちの敵が、悪天使たちを意のままに駆使する強力な総司令官であり、よく練った計画と巧妙な活動をもってキリストに対抗して戦い、魂の救いを妨害しようとしていることを知らない。キリスト者と称する者、いや牧師や伝道師たちの間でさえ、サタンについて語るのは、講壇から何かのついでに触れるくらいで、非常にまれである。彼らは、サタンの絶えざる活動と成功の証拠を見落としている。彼らは、サタンがいかに狡猾であるか、たびたび警告を受けるが、それに注意せず、彼の存在そのものを無視しているように見える。

人々が彼の策略に気付かないでいる間に、この油断のない敵は、あらゆる方面に魔手を伸ばしている。彼は、家の中のすべてのところ、我々の都市のすべての通り、教会の中、議会の中、裁判所の中などに入り込み、人を惑わしたり欺いたり、そそのかしたりしている。また至る所において、老若男女の別なくその心と体を破滅させ、家庭を破壊し、憎悪、競争、鬭争、暴動、殺人の種をまき散らす。そして、キリスト教界一般は、こうしたことを、あたかも神が定めたもので、当然存在するものであるかのように思っているのである。

サタンは神の民の征服を企て、神の民と世俗を隔てている壁を取り壊そうと



努めている。昔イスラエル人は、禁じられた異邦人との交際を敢えてしたとき、罪に誘惑された。そのように、現代のイスラエルも、同じ道を歩いて神から離れていく。「この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのである」(Ⅱコリント 4:4)。断固としてキリストに従う決心をしていない者は、サタンのしもべである。生まれ変わっていない者の心には、罪を愛する思いがあり、罪を慕ってその言い訳をする傾向がある。生まれ変わった心には、罪に対する憎しみと、それに対する断固とした抵抗がある。キリスト者が、神を恐れない不信仰な人々と交わることは、その身を誘惑にさらすようなものである。サタンは姿を隠して、ひそかに彼の欺瞞のおおいを彼らの目にかぶせる。彼らは、このような連れがいて、彼らに害を加えようとしているとは気づかず、品性、言葉、行動において、常に世俗に同化していき、ますます盲目になってしまうのである。

重大な危険

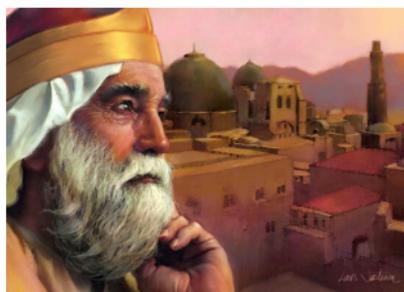
世俗の習慣に従うならば、教会が世俗化する。それは決して世俗をキリストに改宗させることにはならない。罪に慣れてくると、必然的に、罪に反発することが少なくなっていく。サタンのしもべたちと交際することを恐れない者は、やがて、彼らの主人に対する恐怖も失ってしまう。宮廷に立てられたダニエルのように、我々も義務の遂行にあたって試練の立場に置かれた場合には、神が保護して下さることを確信してよいのであるが、しかし自分で誘惑に身をさらすならば、遅かれ早かれ、倒れることになるのである。

しばしばサタンは、我々が、彼の支配下にある人物だとは思えないような人々を用いて、実に巧妙に働きかける。才能があり教育のある者たちは、神を畏れる心がなくても、これらの特質がそれを補い、神の恵みに浴させるか

のように、賞賛され、栄誉を帰せられている。もちろん才能や学識は、それ自体、神の賜物であるが、これを敬虔と義なる品性の代用とすることはできない。あるいは、人々を神に近づけるかわりに神から遠ざけるようなことをするならば、せっかくの学識も呪いとなり、わなと化してしまう。礼儀正しく見えることや洗練された感じを与えることはみな、何かの意味でキリストに関係するものである、と考えている人が多い。しかし、これほど大きな間違いはない。もちろん、こうした特質は、真の宗教のために強力な感化を及ぼすものであるから、すべてのキリスト者の品性の美点でなければならない。しかし、それらは、神にささげられねばならない。さもないと、それらもまた、悪のための力となってしまふ。一般に不道徳と思われる行為はあえてしないところの、知的で教養があり、礼儀正しい人が多くいるが、このような人々は、サタンの手にある洗練された器にすぎない。彼の狡猾で欺瞞的な影響と模範は、キリストの働

きにとって、無知で教養のない人々よりはるかに危険である。

ソロモンの場合がそうである。神への依存と熱心な祈りによって、彼は、世界の驚きと賞賛を引き起こしたところの知恵の持ち主となった。ところが、彼は力の源である神から離れて自分の力に頼って行動した結果、ついに誘惑に陥ってしまった。その時、この最も賢い王に授けられていた驚くべき能力は、彼を、魂の敵サタンの最も強力な手先としたにすぎなかった。



サタンに抵抗する力

サタンは、この事実に対して人の心を盲目にしようと絶えず働いている。キリスト者は、自

分たちの戦いが、「血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦い」であることを、常に忘れてはならない（エペソ 6:12）。さらに、次のような靈感による警告が、各時代を通して発せられて来た。「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししののように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている」（I ペテロ 5:8）。「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい」（エペソ 6:11）。

アダムの時代から今日に至るまで、大敵サタンは圧迫と破壊のために力をふるってきた。今や彼は、教会に対する最後の戦闘の準備をしている。キリストに従おうとする者は誰でも、この大敵と戦わなければならない。キリスト者が、模範であられるイエスにならねばならうほど、ますますサタンの攻撃の的になることは確実である。神の事業に活発に従事し、サタンの欺瞞

をあばき、キリストを人々に紹介する者は、みなパウロと同じ証—謙遜の限りを尽くし、多くの涙と数々の試練の中であって、主に仕えてきたという証—をすることができる。

サタンは巧妙で激烈な誘惑をもってキリストを攻撃したが、そのたびにキリストは断固として退けた。元来、この戦いは我々のための戦いであって、キリストの勝利は、我々を勝利させるものである。キリストは、彼に願い求めるすべての者に力をお与えになる。誰でも自分が同意しない限り、サタンに敗北することはない。サタンには人間の意志を支配したり、強制して罪を犯させたりすることはできない。彼は、我々を悩ますことはできるが、汚すことはできない。苦しめることはできても、汚辱することはできないのである。キリストが勝利されたという事実は、彼に従う者たちに、罪とサタンに対して雄々しく戦う勇気を与えるものである。

天使の实在

目に見える世界と目に見えない世界との関係、神の天使たちの奉仕、悪霊の働きなどは聖書の中に明瞭にあらわされており、人類歴史と不可分に織り混ざっている。一般に、悪霊の存在については、信じない傾向が強まっており、他方、「救を受け継ぐべき人々に奉仕する」聖天使たちは、死者の霊であると考えている人が多い（ヘブル 1:14）。しかし聖書は、善天使と悪天使、両方の存在を教えているばかりでなく、これらは肉体を離れた死者の霊ではないことを明確に証明している。

すでに人類が創造される前に、天使たちは存在していた。それは、地の基がすえられた時、「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」とあることから分かる（ヨブ記 38:7）。また人類の墮落後、命の木を守るために天使が送られたが、この時には、まだ誰も

死んではいなかった。天使は、その性質において人間よりも優れたものであって、詩篇記者が、



人は「ただ少しく天使よりも低く」造られた、と述べたことによっても知ることができる（詩編 8:5 欽定訳）。

聖書には、天の存在者の数、またその力と光栄が書かれている。また、彼らと神の統治との関係、そして贖罪の働きについても記されている。「主はその玉座を天に堅くすえられ、そのまつりごとはすべての物を統べ治める。」「御座……のまわりに、多くの御使たちの声上がるのを聞いた」と預言者は言っている。彼らは、王の王の面前にはべる「勇士たち」、「そのみこころを行うしもべたち」、「そのみ言葉の声を聞

く「使たち」である（詩篇 103:19-21、黙示録 5:11）。預言者ダニエルは、千々万々の天使たちを見た。また使徒パウロも、彼らのことを「無数の天使の祝会」と言った（ダニエル 7:10 参照、ヘブル 12:22）。彼らは神の使者として「いなずまのひらめきのように速く」行き来する（エゼキエル 1:14）。栄光に輝き、迅速に飛ぶ。救い主の墓に現れた天使の姿は、「いなずまの



ように輝き、その衣は雪のように真白であった」ので、見張りたちは恐ろしさのあまり震えあがって、「死人のようになった」（マタイ 28:3,4）。高慢なアッスリヤ人、セナケリブが、神をののしりあざけりつつ、イスラエルを絶ち滅ぼそうとして威嚇したとき、「その夜、主の

使が出て、アッスリヤの陣営で十八万五千人を撃ち殺した。」この時、セナケリブの軍勢の、「すべての大勇士と将官、軍長ら」が滅ぼされた。「それで王は赤面して自分の国に帰った」(列王下 19:35、歴代下 32:21)。

神の民を保護する天使

天使たちは、神の子らに恵みを与えるために遣わされている。アブラハムには、祝福の約束を伝えるため、ソドムの門では、火の破壊から義人ロトを救い出すため、また、飢えと疲れのために荒野において死ぬばかりになっていたエリヤを救うため、敵軍に包囲された小さい町のまわりに、火の戦車と馬を送ってエリシャを救うため、異教の王の宮廷において神の知恵を求め、また、ししの穴に投げられたダニエルを救うため、ヘロデの牢獄で死の宣告を受けたペテロを救うため、ピリピの牢獄の囚人たちを救う

ため、夜、海上
で暴風にあった
パウロとその仲
間を救うため、
コルネリオの
目を開いて福音
を信じるように



し、そして、この未知の異邦人に救いの使命を
伝えにペテロを送るため、一こうしたことのため
に天使たちは、各時代にわたり神の民のため
に奉仕してきたのである。

キリストに従うすべての者に保護天使がつ
けられている。これら天からの守護者が、義人
を悪人の手から守るのである。この事実は、サ
タン自身も認めて、「ヨブはいたずらに神を恐
れましようか。あなたは彼とその家およびすべ
ての所有物のまわりにくまなく、まがきを設け
られたではありませんか」と言った（ヨブ記
1:9,10）。神がご自分の民を守られる方法につ

いて、詩篇記者は、「主の使は主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」と言っている（詩篇 34:7）。救い主は、彼を信じる者たちについて、「あなたがたは、これらの小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい。あなたがたに言うが、彼らの御使たちは天にあって、天にいますわたしの父のみ顔をいつも仰いでいるのである」と言われた（マタイ 18:10）。神の子供たちに奉仕することを命じられた天使たちは、常に神のみ前に行くことができるのである。

こうして神の民は、暗黒の王の絶え間ない悪意と欺瞞に襲われ、様々な悪の勢力と戦う場合にも、天使たちの絶えざる保護が保証されている。必要がなければ、このような保証は与えられない。神がその民に恵みと保護を約束されたということは、当面すべき強力な悪の勢力—無数の、断固たる、疲れを知らない勢力であって、その悪意と力について無知であったり無関心で

いては、誰一人安全ではあり得ない—があるからである。

サタンの勢力

悪霊たちは、元来、罪のない者として創造され、その性質と力と栄光において、今神の使いをしている聖なる存在者たちと同じであった。しかし、罪のゆえに墮落し、神のみ名を汚し人類を滅ぼすために彼らは団結するに至った。彼らはサタンの反逆に加担し、彼と共に天から追放され、以来各時代を通じて、サタンと協力して神の権威に対する抵抗を続けているのである。聖書には彼らの同盟と政府、その階級、その知性と陰険さ、人間の平和と幸福を破壊しようとする悪だくみのことが記されている。

旧約の歴史においても、しばしば彼らの存在とその働きについて記されているが、キリストのご在世当時ほど、悪霊がその猛威を振るった

ことは他になかった。キリストは、人類救済の計画を実行するために来られた。そしてサタンは、世界の支配権は自分にあるということを断固として主張することに決めた。彼はすでに、パレスチナを除く全地に、偶像礼拝を確立することに成功していた。キリストは、誘惑者の支配に完全には服していない唯一の国に、天来の光を輝かすために来られた。ここで二つの対立した勢力が、覇権を争うことになった。主イエスは、彼の愛の腕を広げ、彼から許しと平和を受けよと、すべての者を招かれた。一方、暗黒の軍勢は、自分たちの支配には限度があることを認め、もしキリストの任務が成功するならば、自分たちの支配は直ちに終わることを知った。そこでサタンは、鎖でつながれたししのようにほえたけり、人々の心身に猛然と力を振るった。

人間が悪霊につかれるということは、新約聖書の中にはっきりと述べられている。これに悩まされた人々は、ただ単に普通の原因で起き

る病気に苦しんでいたのではなかった。この点キリストはその真相を完全に理解されて、実際に悪霊が存在し働いていることを認めておられた。

彼らの数と力とその凶悪さの顕著な实例、そして同時にキリストの恵みと力の顕著な实例は、聖書の中、特に、ガダラ人がいやされ、悪鬼を追い出された实例によって、明らかに見ることが出来る。これらの哀れな狂人たちは、あらゆる鎖を断ち切って、もがき苦しみ、あわをふいて怒り狂い、大声で叫びながら自分たちの身を傷つけ、近づいてくる人には誰にでも飛びかかりそうであった。彼らの傷ついた血みどろの身体と錯乱した精神は、暗黒の君が喜ぶ光景であった。彼らにとりついていた悪霊の一人は「レギオンと言います。大ぜいなのですから」と言った(マルコ 5:9)。ローマの軍隊では、一レギオンというのは、三千から五千の人員で構成されていた。サタンの軍勢もまた、同様に

集団をなして進軍し、しかもこの場合の悪霊は、レギオンほどの大きなものであった。

悪霊につかれた者

イエスのご命令によって、悪霊は今までとりついていた人々から離れ、彼らは平静と知性と温順さを取り戻して、救い主の足下に静かに座っていた。しかし、これらの悪霊たちは、豚の一群を海へと駆け下らせることを求め、許された。ガダラの住民たちは、キリストがあらわされた祝福よりも、豚の損失のほうが重大だったので、天来のいやし主に退去を求めた。これは、サタンの常套手段である。彼らの損失をイエ



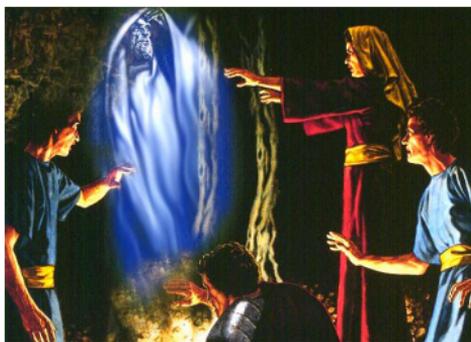
スのせいにして、人々に利己的恐怖心を起こさせ、彼らがみ言葉に接することを阻んだのである。サタンは、損失、不幸、苦難を、自分自分の手下たちで引き起こしておきながら、その当然の責めを負わず、常にそれをキリスト者のせいにして非難するのである。

しかし、キリストの目的が妨害された訳ではなかった。彼が悪霊に豚の大群を滅ぼすことを許されたのは、このような汚れた獣を金もうけのために飼育していたユダヤ人を譴責するためであった。もしキリストが悪霊を抑制されなかったならば、彼らは、豚ばかりでなく、飼い主や持ち主たちをも海に投げ込んだことであろう。その飼い主と持ち主とを保護されたのは、実に主の力が彼らの救いのために、恵みのうちに働いたからに他ならなかった。この時の事件は、人間と動物に対していかにサタンが残忍であるかを、弟子たちに目撃させるために、起こることを許されたのであった。救い主は、弟子

たちが遭遇しなければならぬ敵が何であるかを知り、その悪たくみに欺かれたり、敗北したりしないようにと望まれた。同時にその地方の人々が、サタンのかせを砕き、その捕虜となっている者を解き放たれるイエスの力を見ることが、彼のみ心であった。イエスは退去なされたが、この時驚くべき救いにあずかった人々が、イエスのあわれみを宣べ伝えるため後に残された。

同様の実例が、他にも聖書に記されている。スロ・フェニキヤの女の娘は悪霊にとりつかれて非常に悩まされていたが、イエスの一言によって悪霊は追い出された（マルコ 7:26-30 参照）。「悪霊につかれた盲人で口のきけない人」（マタイ 12:22）。たびたび「火の中、水の中に投げ入れて、殺そうと」する口をきけなくする霊につかれた子供（マルコ 9:17-27）。安息日にカペナウムの会堂の静けさを破った「汚れた悪霊につかれた人」（ルカ 4:33-36）。これらの

人々はみな、あわれみ深い主によっていやされたのであった。ほとんどすべての場合、キリストは、一個の知性を持った存在としての悪霊に呼びかけ、その虜となった者から出て、再び悩ますことがないようにと命じられるのが常であった。カペナウムの人々は、彼の偉大な力を見て驚き語り合って言った。「これは、いったい、なんという言葉だろう。権威と力とをもって汚れた霊に命じられると、彼らは出て行くのだ」(ルカ 4:36)。普通、悪霊につかれた者は非常に苦しむものとされているが、その例外もあった。超自然の力を得るために、進んでサタンの力に服する者がある。このような人々には、悪霊との戦いはもちろんない。この種の人々に、占いの霊につかれた者たち、すなわち、魔術師シモン、魔術師



エルマ、ピリピにおいてパウロとシラスを追ってきた娘などがある。

サタンの巧妙な策略

悪霊の感化について、聖書に直接的な数多くの証拠があるにもかかわらず、サタンと悪天使たちの存在とその働きを否認する人々ほど、悪霊の力に動かされる大きな危険の中にある人たちはいない。我々が彼らの策略に無知である限り、彼らは我々には想像もつかないほど優位にある。多くの者は、彼らの暗示に耳をかし、それでいて、自分自身の知恵の命じるところに従っていると考える。このために、サタンは終末が近づくにつれて、ますます人々を欺き滅ぼそうとして、サタンは存在しないという考えを至る所に広めるのである。自分と自分のやりかたを隠すのが、サタンの手である。

この大欺瞞者サタンが最も恐れていること

は、我々が彼の策略を見破ることである。彼は巧みに自分の正体と目的を隠すために、嘲笑、あるいは軽蔑ぐらいはよいが、それ以上の激しい感情を人々に抱かせないように、自らを誤って描写させている。彼は自分が、こっけいな、あるいは胸の悪くなるようなもの、ぶかっこうな半獣半人として描かれることを好む。またサタンは、知力あり分別あるものと自認している人々が彼の名を嘲笑し冷やかすのを聞いて、喜ぶのである。

「そんなものが実際にいるのか」という疑問がどこに行っても発せられるのは、サタンが非常に巧妙な仮面をかぶってきたからである。また、一般宗教界において、聖書の明白な証言に矛盾する説が一般に容認されていることは、彼の成功を証拠だてている。神の言葉が、彼の凶悪な行為の実例を多数挙げて、彼の隠れた力を暴露し、その攻撃に対して我々に警戒させているのは、サタンの力を知らない者の心は実にはた

やすくサタンに支配されるからである。

もし我々が、悪魔よりも強い救い主によって、救いと保護とにあずかっていないならば、サタンとその部下の力と悪意に対して恐怖を抱くのは当然であろう。我々は自分の家の戸締まりを厳重にし、悪人の手から自分の生命と財産を守ることに注意を怠らない。しかし、自分の力や方法では到底勝つことができず、またその攻撃に抵抗し得ない悪天使のことを考えることはきわめて少ない。もし許されるならば、彼らは我々の心を狂わせ、体に変調を起こさせて



苦しめ、財産を破壊し生命を奪うのである。彼らは悲惨と破壊をもたらすことを唯一の喜びとする。神のご要求を拒み、サタンの誘惑に屈する者の状態は実に恐ろしく、神もついには彼らを、悪霊の支配に渡されるようなことになるのである。しかし、キリストに従う者は、常に彼の保護のもとにあって安全である。天から力強い天使たちが彼らを保護するために遣わされる。悪人たちは、神が神の民の回りに配置された警護を破ることができないのである。

もっと詳しく知りたい方のために、
大争闘小冊子シリーズの完全版

“キリストとサタンの大争闘”



E. G. ホワイト著

ポケット版 400円

各時代の人類歴史に展開されてきた善と悪、真理と誤謬の大争闘の真相と悪の勢力の陰謀と策略を明らかにし、それに勝利する方法、今起こっている諸事件と諸現象はどんな意味を持っているか、人類にどんなすばらしい未来が待っているか等々が解明されている必読の書！

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com

大争闘小冊子シリーズ

- No.1 罪惡の起源
- No.2 サタンと人類の戦い
- No.3 悪魔のわな
- No.4 人は死んだらどうなるか？
- No.5 心霊術の正体
- No.6 現代キリスト教会の危機
- No.7 ローマ法王教の狙い
- No.8 差し迫った戦い
- No.9 ただ一つの防壁—聖書
- No.10 世界への最後の警告
- No.11 大いなる悩みの時
- No.12 神の民の救出
- No.13 平和な千年期は来るか？
- No.14 大争闘の終結



サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com